

「同志社大学設立の旨意」を読み解く

原 誠	同志社大学神学部長 同志社大学神学部教授
講師紹介【はら・まこと】	【研究テーマ】 日本とアジアのプロテスタント・キリスト教会の歴史

同志社とリベラル・エデュケーション

私は現在、同志社大学神学部の教員として、日本のプロテスタントのキリスト教の歴史、東南アジアのキリスト教の歴史をおもに勉強しています。同志社の神学部には本井先生という、新島襄・同志社の研究者がおられまして、その分野では本井先生には、はるかに見劣りするわけです。しかし一応、同志社、キリスト教というのも私の守備範囲ですので、この授業では私なりの切り口でキリスト教、同志社という位置づけをしようとしております。

今日は「同志社大学設立の旨意」に絡めての講演となります。一八七五年十一月、同志社英学校が創立されました。そのとき、設立の発起人の一人であり、同志となった山本覚馬と新島が結社をして同志社となり、同志社という名前は新島ではなく山本が与えて、八名の学生によって、新島から見ると先輩の宣教師であるデヴィスを雇う形でスタートしました。しかしいつまで続くか分からない、という基盤の弱さがあつたところに、熊本から多くの優秀な学生が入ってきて同志社が真に同志社となっていくたということは、以前にお話ししました。大学をつくるには、十分な基本金がないと学校として認められないということがあります。もちろん基本金だけではなく、大学にふさわしい教員が揃っているかということも厳しい審査の対象になります。新島の悲願は大学をつくりたい、同志社英学校から大学にしたいということで、同志社の社長であつた新島は、同志社に留まって学生と接していたわけではなく、大学をつくるために全国を走り回っておりまして。

一八八九年、新島は体調を崩して病床に伏し、一八九〇年に四十六歳十ヵ月でこの世の命を終わります。彼が病を得たのはどこか。群馬県の前橋です。なぜ前橋に行っていたか。新島の日常生活を見ていくと、新島は、全国に散らばっていった卒業生たちのなかで、とりわけ教会の牧師となって働いている若い卒業生たちを訪ねて、元気にしているか、不自由なことはないか、というサポートをして回っていました。またその地域の有力者に会って「同志社に寄付をしてほしい」という寄付金集め、「ぜひ優秀な学生を同志社に送ってほしい」という学生募集で走り回っていました。前橋に現在もある共愛学園という学校で働いていた、シェッドという宣教師の家で夕食のときに体調を崩してしまうのです。

それは、新島は大々的に同志社大学設立運動を開始したときでもありました。学生の皆さんは、「同志社大学設立の旨意」の抜粋はまだ持っていますか。入学式の式次第にあつて、学生支援センター所長が朗読しました。今の私たちからすると文章が難解ですので、聞いただけでは全然分からないかもしれませんが、こういう文章が読まれたことを言われてみれば思ひ出すと思います。このような「同志社大学設立の旨意」のことについて、今日をご紹介します。

もともと同志社のみならず、有力なキリスト教系大学として存在している学校がたくさんありますが、それらの学校は、基本的には言葉の正確な意味でミッションスクールでありました。宣教師がお金を集め、アメリカの宣教団体が人材を送り込んで日本に学校をつくる、教会をつくる、オーナーがアメリカの宣教師たちでした。しかし同志社はそうではなく、新島が建てたと言っていますが、クラーク記念館、ハリス理化学館、いろんなところにアメリカ人の名前を冠した建物があり、京田辺にもデヴィスとかラーネッドとかありますように、実際問題はアメリカのお金が強力に入っています。新島はしたたかな人間です。お金はどんどんもらう。しかしもらったものは日本人の学校で、同志社は日本人によって建てられたのだという使い方で、単なる言葉の正確な意味でのミッションスクールではないということを言い続けていたのですが、実態はミッションスクールのようなところもありました。どうしてそういふことが分かるかというと、同志社で働いていた多くの宣教師たちは、本国のアメリカにレポートを送るわけです。彼らは同志社のことを、「京都トレーニングスクール」と呼んでいます。ここでミスマッチがあるわけです。キリスト教を徳育の基本とするという思想で立ち上げていった同志社でありながら、同志社で働いた多くの宣教師たちは、日本人牧師養成学校と見ていたわけです。新島は、日本人の弟子たち、日本人の教員、日本人の学生たち、アメリカンボードの宣教師たちとの間に挟まって非常な苦勞をしたのです。バランスをうまくとっていくということで苦しんだのでした。新島が目指したのはリベラル・エデュケーション、今日でいう一般教養でありました。同志社が目指したのはパチェラー・オブ・アーツです。アメリカの大学は今もなお、大学を卒業するとパチェラー・オブ・アーツ・イン・エコノミックスとか、パチェラー・オブ・アーツ・イン・エンジニアリングと言います。学士で文学を専門に学んだが、パチェラー・オブ・アーツ・一般教養学士。専門は歴史だった、専門は哲学だった、経済学だったというものです。

そのように将来、官僚になるにしても、実業家になるにしても、牧師になるにしても、法律家になるにしても、社会事業家になるにしても、基礎的に幅広い教養を身につけて、単なる立身出世のための学校とはしないというのが狙いでありました。同志社英学校をつくって以降も、大学をつくりたいと寄付金集めに全国を走り回っていたのでありました。その具体的な運動は一八八二年から開始します。

「同志社大学設立の旨意」は、入学式の式次第にあるようなものは実は八種類あるのです。最初に骨案が出ます。何度も手を入れ、考え直すことが続けられていったわけですが、最初の同志社大学設立の運動は一八八二年、同志社英学校の創立が一八七五年のことですから、七年後ということになります。このときも同志社大学をつくりたいという願いをもって、「我輩ノ目的ハ一時ノ需要ニ応シ、一世ノ喝采ヲ求ムルニアラス。又一世ノ批評ニ依テ左右変更スルモノニアラス」として、三つの学部、すなわち宗教・医学・法学の学部をつくりたいと考えておりました。「我輩ノ目的ハ一時ノ需要ニ応シ」というのはどういうことか。現代的に翻訳していきますと、たとえば現在、医師不足だ、産婦人科医が足りないとか聞いています。医学部をつくり、とりわけ産婦人科の医者をたくさんつくらないといけない、という状況です。これからはビジネスの世界で起業家が必要だとなると、そういう時代のニーズに応じて学部をつくるということもあるかもしれません。時代の傾向に応じて、この学部を、あの学部を、需要と供給をうまくやっていくことで学校経営をしているというのでは、当然ある姿はありましようけれども、新島は、そのようなものではないということを、ここで言っているわけです。

「一世ノ喝采ヲ求ムルニアラス、又一世ノ批評ニ依テ左右変更スルモノニアラス」。キリスト教がだめだというなら、キリスト教を捨ててしまつとか、法学が大切だというなら法学部を拡充するとか、そんなものが本当の教育ではない。リベラル・エデュケーションはもっともっと深い根本的なものであり、そして三つの学部、すなわち宗教・医学・法学を求めたということです。

これについては少し補足説明をする必要があるかと思ひます。昔、私が大学生のときに、「そもそも大学とは何か」という授業を聞いた覚えはありません。今の皆さんの考えにしてみると、「大学、行くところ」「どの学部だったら」というのはあるかもしれませんが、「そもそも大学とは何か」という、大学論についてほとんど注意を払わない。少なくともはっきり言えることは、キリスト教に基づいたヨーロッパの世界のなかで大学というのが生まれていったのです。ちょっと語弊がありますが、学生というのは遊び人だったのです。ソルボンヌ大学にはこういう先生がいる。パリ大学にはこういう先生がいる、ドイツのフンボルト大学にはこういう先生がいるとなると、その時代の教養人の言語はラテン語でしたから、イタリアであろうと、フランスであろうと、ドイツであろうとラテン語の世界で、あの大学には修辞学の偉い先生がいる、法学の偉い先生がいるという、そこに行つて授業料を払つて半年間くらいその先生のところで勉強して、それが終わつたら次はパリ大学に、次はフンボルト大学に動いていく、そういうところがヨーロッパの大学の出発点だったわけです。その学部というのはどういふのか。今、大学の学部のなかで専門科目ばかりやっていて、基礎教養はほとんどないでしよう。多くの学生は専門科目をとりたいがためのわけです。ヨーロッパの学問、「大学論」で言えば、キリスト教に基づいた一つの世界があり、この根っこには教会があつて、一つの世界があつて、その世界で人間の営み、社会の営みのなかでどういうことが必要になるかということ、神学・医学・法学の三分野です。社会というときに、私たちの暮らしの営みの問題として法律が必要です。法とは何か。法が細分化されて国際法だったり、民法であつたり、刑事訴訟法だったりとなります。社会の問題は物が生産されて、流通して消費される、それが円滑に動かなければならない。それが経済学であり、商学である。人間の身体を養うために、病気があつるといけないということで、人間の身体をいじります。実証的に人体実験をしたりして医学が進んでいく。薬学・医学が必要になります。そして人間は悩みます、希望をもちます、失望します、絶望します。ここで哲学、歴史学、文学が必要になります。こういうことが基礎的な教養になっていて、これがリベラルアーツであり、パチェラー・オブ・アーツであり、それから上に医学・法学・神学があり、専門課程で大学院に行く。これはまさに新島が、アメリカのアーモスト大学で学んだ体験だったわけです。細分化されたスペシャリストで、法学部でたたき込んで司法試験の合格率を上げる、悪いことではないですよ。あるいは公認会計士の合格者トップテンに入る、すばらしいことです。しかしそのためにだけ勉強するということではだめですよというのが、同志社大学の設立のときの骨案に出てくるのです。宗教・医学・法学、これがもともとの同志社大学の出発点だったわけです。

そこで人間教育を行い、「智徳並行」によるリベラルアーツカレッジをつくり、そしてその上に専門学部を構想する総合大学を考えていたというわけです。時代のなかで右とか左に動かされることのない、深い人間理解と世界理解をもったものであり、それはキリスト教を信じればいい、学べばいいという話ではないということです。

徳富蘇峰について

同志社には、『同志社百年史』という厚い本が二冊あります。同志社百年史に用いられている「資料集」があります。その中には骨案から始まって、全部で八種類の設立のための文章が残されております。一時期は「同志社大学」という名前ではなく「明治専門学校」という名前を考えた時期もあったようですが、結局、「同志社大学」という名前になりました。新島がアメリカから戻ってきて、一八七五年、山本覚馬と結社をして今出川の土地を手に入れた。結社をしたときに、同志社という名前を考え出したのは山本覚馬でした。新島がネーミングしたわけではないのです。同志社大学になるときもいくつかの案が出てきたなかで、やっぱり同志社大学にしようという結論を出したのは徳富蘇峰で、同志社大学になったわけです。

徳富蘇峰という人物はどういう人か、ご紹介をいたします。『日本キリスト教歴史大事典』の中にある徳富蘇峰の文章です。ジャーナリスト。肥後藩水俣に徳富一敬の長男として生まれる。名は猪一郎、蘇峰は号。熊本洋学校に学び、熊本バンドの一員であり、花岡山の契約に加つた人です。一八七六年秋、同志社英学校に編入学をし、新島のもとで洗礼を受けてクリスチャンとなります。しかしあと二ヵ月で卒業というときに、彼は同志社を中退してしまいます。新島は彼を惜しんで「あともうちょっと頑張れば卒業できるのだから、辞めるのをやめなさい」と一生懸命に説得するのですが、若気の至りというべきか、一度言つたらもう元に戻らんと彼は辞めてしまつたわけです。同時に教会からも脱会する。これは普通、教

会の世界では洗礼を受けるということは一生ものの話ですから、本人が「私はクリスチャンをやめた」と言っても教会は除名をしません。しかし彼は、教会からもキリスト教からも脱会をしてしまうのです。この段階で新島を裏切った、新島を捨てた、同志社を捨てたという人物なのです。

このとき、なぜそういうことになったのか。同志社では最近、きちんと検証しなければならない、といわれておりますが、従来、同志社のなかでいわれてきたことはいうことで。学校ができて間がなかった、学生の数も少ない。大学に入って一年間、英語を勉強する。二年生になれば英語Ⅱに行く。そこに一年生が入ってきた。一年生のために英語Ⅰを教える。ところが教室の数が足りない、学生数が少ない。二年生になっても一年生と一緒に、もう一回授業を受けなさいとなったわけです。新島は校長ではあるけれども、全国を飛び回っていて、なかなか細かい教務事務に責任がもてない。同志社は、学生のストライキをやる大学、学生の自治会運動で最も先鋭的に闘う大学の関西の雄でした。日本全国でも指折りの、学生運動が激しい大学の一つです。同志社は、日本の学校の中で最初に学生がストライキをやった学校です。卒業間際の連中が、また下級生と一緒に授業を受けるというので、上級生が不満に思っ

て同盟してストライキをやった。授業に出てこない。新島は、これに苦慮したわけです。そこでどうしたか。同志社のエピソードで言えば「自責の杖事件」が起こります。同盟して学生同士で語らって授業に出てこない。学則に従えば処罰の対象です。しかしなぜ同盟してサボタージュしたか。そういう教務事務をやってしまった学校側にも責任がある。全く是とは言えない、問題があった。新島は本当に苦慮して、責任者を罰しなければならないということで、朝礼のとき、「今から責任者を罰しなければならない。宣教師諸君、御免」と言って校のステッキを手の上において自分で叩きつけた。三つ、四つ飛び散った破片の実物は社史収蔵庫に保存されています。同志社の歴史にかかわるものが保存されていて、年一回くらい虫干しをしています。収蔵庫ができたのは新島没後五十年のときで、同志社の校友の人たちがお金を出し合っ

て建てて、その中に新島の自責の杖は残っています。そういうこともあって、学生ストライキの急先鋒であったために、徳富蘇峰は去ってしまうわけです。その後、彼はどこに行ったか。熊本に戻り大江義塾を一八八二年に開設して『将来之日本』という本を書きます。これが爆発的に売れたわけです。若いジャーナリスト、社会評論をする人物として有名になります。民友社を創設、『国民之友』を刊行しジャーナリストとなるわけですが、民友社を設立するには裏話があります。彼には初子という姉がおりまして、初子は湯浅治郎と結婚し、後妻となります。湯浅は群馬県安中にある味噌・醤油屋で、新島を本当に支えた開明的な実業家でありました。湯浅には、先妻の茂登子との間に一郎、にい、三郎、四郎と子どもがいました。茂登子が死んでしまって、初子と再婚して生まれた一人が湯浅八郎、同志社の長い歴史のなかで二回に渡って同志社の総長になった人です。戦時下の非常に厳しいときに同志社の総長をやりまし

た。戦後、民主主義の時代になって、再び同志社に迎えられて同志社社長となった。国際基督教大学が創立されたときに初代総長として国際基督教大学に移った人です。湯浅治郎の八番目の子どもです。湯浅治郎は、クリスチャンの実業家で、ある意味でお金があるわけです。この人がスポンサーとなって民友社を建てるのに資金をサポートする。そして『将来之日本』が爆発的に売れたということです。ある意味で狭い人間関係、濃密な人間関係のなかで同志社もかかわったと言えるだろうと思います。

「同志社大学設立の旨意」

徳富蘇峰は新島を裏切って、同志社を出ていった人間でありながら、新島と徳富との信頼関係は生涯を通して変わることがありませんでした。皆さんも私も含めて、クリスチャンだったらクリスチャン同士仲良くあります。類は類を呼ぶ。しかし新島と徳富とは「類は類」ではなく、片方はクリスチャンであって、宣教師であって、牧師です。他方は、キリスト教を捨てていった裏切り者というわけです。しかし新島と徳富との間には、終生変わることのない深い理解があったのです。徳富は文章が書ける。入学式のときの、「同志社大学設立の旨意」の文章は、抜粋なのです。最終的に公表されたときには、四〇〇字詰め原稿用紙二十枚に及び長大な大論文だったのです。この文章を読んで、これを同志社大学設立の旨意の文章だというならば、十分の

くらいだと理解してください。新島はあまりにも忙しく体調も優れないということで、「同志社大学設立の旨意」の骨案に何度も手を入れて、最終的な「同志社大学設立の旨意」の執筆を徳富に委ねます。全部の資料を徳富に渡すわけです。徳富が文章を書いたもので、これが「回顧すれば既に二十余年前云々」というものです。この文章の中に付け加えられているものもあります。「同志社大学の設立の旨意」に触れていないものを一部残したのです。一部抜粋というものです。あらためて両方読み合わせてみます。

「回顧すれば既に二十余年前、幕政の末路、外交切迫して人心動揺するの時に際し」、アメリカに渡ることができて、アメリカのクリスチャンに出会って学ぶことができた。アメリカにいた十年の間に、キリスト教に基づいた教育施設をつくりたいという夢をもって日本に戻ってきた。これが明治七年末、帰国の後、同志社英学校を設立して、これが同志社の出発であります、と。

「其目的とする所は、独り普通の英学を教授するのみならず、其徳性を涵養し、其品行を高尚ならしめ、其精神を正大ならしめんことを勉め、独り技艺才能ある人物を教育するに止まらず、所謂の良心を手腕に運用するの人物を出さん事を勉めたりき、而して斯くの如き教育は、決して一方に偏したる智育にて達し得可き者に非ず、唯だ上帝（キリスト教で言うところの神）を信じ、真理を愛し、人情を敦くする基督教主義の道德に存することを信じ、基督教主義を以て徳育の基本と為せり」。これは、学生の皆さんが持っている学生手帳にも載っていますよね。

「吾人は政府の手に於て設立したる大学の実に有益なるを疑はず、然れども人民の手に拠って設立する大学の、実に大なる感化を国民に及ぼすことを信ず、其生徒の独自一己の気象を発揮し、自治自立の人民を養成するに至って、是れ私立大学特性の長所たるを信ぜずんば非ず」。日本の旧帝国大学のトップは東大法学部であり、国家の官僚養成の学校でありました。このモデルは中国の科挙から起因するような立身出世主義であります

が、日本の場合は同時に極めて平等でしたから、赤貧洗うが如しの貧しい家庭に生まれながらも勤勉刻苦努力して一生懸命に切磋琢磨勉強すれば東大に入れる道を開いたというのも、日本の明治以来の教育制度の優れた点でありました。同志社大学にける思いというのは、こうすることで、立身出世主義ではない、官僚養成の学校ではないと明確に言っています。「独り技艺才能ある人物を教育するに止まらず、所謂の良心を手腕に運用するの人物を出さん事を勉めたりき」。リベラルアーツを徹底的に、ということです。「而して斯くの如き教育は、決して一方に偏したる智育にて達し得可き者に非ず、唯だ上帝を信じ、真理を信じ、人情を敦くする基督教主義の道德に存することを信じ、基督教主義を以て徳育の基本と為せり」。国立大学は国立大学としていいけれども、「然しれども人民の手によって設立する大学の実に大なる感化を国民に及ぼすことを信ず。私立大学特性の長所たるを信ぜずんば非ず」。しかし民衆の、国民の民間の手によってなる私立の大学は、国立大学とは全く違う分野で存在意義があるのだ、ということをやっているわけです。ここでは偏差値の上下という優越感、コンプレックスとは全く関係なしに、違う教育理念があると言っているわけです。

「教育とは人の能力を発達せしむのみに止まらず、総べての能力を円満に発達せしむることを期せざる可からず、如何に學術技艺に長じたりとも、其人物にして、薄志弱行の人たらば、決して一国の命運を負擔す可き人物と云ふ可からず、若し教育の主義にして其正鵠を誤り、一国の青年を導いて、偏僻の模型中に入れ、偏僻の人物を養成するが如き事あらば、是れ実に教育は一国を禍ひする者と謂わざる可からず」、パラノイア、偏執狂で、あることだけは無茶苦茶すごいけれど、バランスが全然とれていないということはあるわけですね。もしこういう独裁者が生まれてくれば日本の社会はどうなるか、ということをやっているわけです。事実、これ以降、日本の歴史のなかでどのような時代があったかということをお分かりいただけると思います。

「一国を維持するは、決して二三英雄の力に知らず、実に一国を組織する教育あり、智識あり、品行ある人民の力に拠らざる可からず、是等の人民は一国の良心とも謂ふ可き人々なり」。いうことは国民全体の平均レベルを上げていく。一人ひとりが自分でものを考えて、自分で決断し、決断したことについて自分で責任を負い、社会全体のレベルを上げていくことが大切なのだという理念が、ここにあることはお分かりいただけると思います。文章は、これはこれで十分完結しているわけですが、私がコピーをとった、一部抜粋の方をごらんください。上の方は一緒です。

・・・（前略）

「其目的とする所は、独り普通の英学を教授するのみならず、其特性を涵養し、其品性を高尚ならしめ、其精神を正大ならしめんことを勉め、独り技艺才能ある人物を教育するに止まらず、所謂の良心を手腕に運用するの人物を出さん事を勉めたりき、而して斯の如き教育は、決して一方に偏したる知育にて達し得可き者に非ず、又た既に人心を支配するの能力を失ふたる儒教主義に能くす可き所に非ず」、儒教主義は徳川時代、一貫した価値観でありました。このような価値観で今後の日本が形成されるはずがない。科挙とかも含めて国立大学は認めるけれども、そのような儒教主義はこれからの日本には有効性、妥当性をもたないというわけです。

「唯上帝を信じ、真理を愛し、人情を敦くする基督教主義の道德に存することを信じ、基督教主義を以て徳育の基本と為せり」。

「吾人が世の教育家と其趣を異にしたるも茲に在り、而して同志社が数年荊棘の下に埋没したるも亦た茲に在り」。世の教育家とは誰か。前段で東京帝国大学を中心として形成されていうところが国立大学を、儒教主義による教育として批判し、次の「吾人が世の教育家」と言っているのは、これは福澤諭吉のことです。慶應義塾大学は有力な大学として、すでにこの時代から脚光を浴びていました。官学に対して私学がありますが、慶應の私学は実学なのです。慶應の出発点は商学部や経済学でした。確かにこれは大切なことです。熊本バンドに入ってジェーンズのもとで学んでいた学生たちは最初、官僚になること、自分たちで組閣をする、閣僚になることを夢見ていた頭脳優秀な青年たちでありました。しかし、ジェーンズのもとで学んでいくなかで、それぞれの分野の学問がどんどん進んでいくことによって、ジェーンズが官僚嫌いだっ

た影響を受け、ほとんどの学生が実学に目を向けていきます。物が豊かに生産され、スムーズに流通し、消費者の手に届く。そのためには経済学がいる、商学がいる。物をつくるための機械をつくらないといけない。機械製造、物を輸送するためには鉄道がある、線路がある、蒸気機関を進めなければいけない。蒸気船をつくるためには石炭を運ばなければならない、港をつくらなければ、という実学に学生たちは目を向けていて、その根っこにあるところのキリスト教に目を向けていくようになって、この旨意書になった。まさにこのことでもあるわけです。実際に文章を書いた徳富蘇峰そのものでもあるわけです。彼ら自身の、徳富蘇峰自身の価値観の変遷が、ここにも表れているのであります。「世の教育家と其趣を異にしたるも」というのは、そういうことであります。

いつの時代も、時代のマーケットにうまくかみ合えば成長することはあるわけです。合わないればひしゃげていく、萎んでいくこともあるわけです。確かにそういう側面はあると思います。社会のニーズに合わないものを生産しても、消費者に受け入れられなければ商売として成り立たないでしょう。しかし学校は商売ではない、教育はそういう次元の問題ではないということです。新島はよく承知していましたし、また筆を起こした徳富蘇峰は新島を捨てた、同志社を捨てた人間でありながら、新島の考え方を本当によく分かったということです。

「之を要するに吾人は敢て文学の智識を学習せしむに止まらず、之を学習せしむるに加えて、更に是等の智識を涵養するの品行と精神とを養成せんことを希望するなり」。私たちが大学で学んだことの知識をどのように社会に貢献していくのかということであり

ます。昨今もつらつら思いますね、今だけの話ではない、何年も何年もあるところ、テレビの中で企業のトップが「申し訳ありませんでした」と頭を下げていますね。官僚において、そうであり、実業の世界においても、そうであり、学んだことは何なのか。専門知識を学んで企業のなかで運用すること

はどうか、その根本が問われている。教育原理というか、そういうことが求められている、これこそ教育の原点だと言っているわけですね。

「而して斯の如き品行と製品とを養成するは、決して区々たる理論、区々たる検束法の能く為す所に非ず」。もちろん科目によっては暗記が必要だったり、方式を暗記したり、記号を暗記したり、法律だったら条文を覚えるとか、それぞれの学問の特性があるかと思いますが、「それしか知らん」ということでは困るということです。

同志社のキリスト教主義

「実に活ける力ある基督教主義に非ざれば、能はざるを信ず、是れ基督教主義を以て、我が同志社大学徳育の基本と為す所以ん、而して此の教育を施さんが為に同志社大学を設立せんと欲する所以なり」。私は次の文章がとても大切だと思っています。

「吾人の目的斯くの如し、若し夫れ此事を目して基督教拡張の手段なり、伝道師養成の目的と伝ふ者は、未だ吾人の心事を知らざる人なり、吾人が志す所の者、尚ほ其上に在るなり、吾人は基督教を拡張せんが為に大学校を設立するに非ず、唯だ基督教主義は、実に我が青年の精神と品行とを陶冶する活力あることを信じ、此の主義を以て教育に適用し、更に此の主義を以て品行を陶冶する人物を養成せんと欲するのみ」。この文章の意味、伝道師養成、と誤解してもらっては困る、という意味がお分かりいただけますでしょうか。いい悪いを言っているつもりはありませんが、関西学院大学や立教大学などの場合、まずは日本にミッションスクールができて、アメリカ人によって学校が運営されて、日本人牧師を養成して神学校をつくり、日本人にキリスト教の伝道をする。宣教師が日本にやってくる。日本語を学ぶ機会がない。宣教師のための日本語学校を用意するところから英文科ができ、広がっていった文学部ができ、経済学部ができ、商学部ができます。それが現在の関西学院であり、立教大学になっていく。同志社大学もそれに負けず劣らず大きな大学になりましたが、出発の思想が違う。

これは、皆さんが同志社大学に入ったら、キリスト教を学ばなくていいということを意味しません。また信じるということでもありません。同志社大学に入ったのだからクリスチャンにならなければならないということでもない。キリスト教を学ぶということは、その思想・人間観・社会観・世界観・命・職業観・政治理解・法律理解・社会福祉の理解をととして、私はどういう思想を形成するのか、どういう価値観を形成するのか、これが問われていくということなのです。そのことをととして、もしあなたがたがキリスト教を学び、聖書を読んで、教会に行って、クリスチャンになるのであれば、おそらくこれは望外の喜びです。しかしクリスチャンになればいいんではないということとは違う、という意味をぜひ知っていたいただければと思います。

日本の社会のなかで、平均的な宗教土壌・宗教事情は、除夜の鐘を聞いて初詣に行き、そしてお盆になればお墓参りに行きます。皆さんは、お墓のあるお寺の、宗旨、仏教の教えはちゃんと理解されていますか。家には神棚と仏壇が一緒にあるという、日本の文化事情・宗教事情のなかで、キリスト教を知り学び、そういうなかで自分の思想・価値観が「神を信じない生き方だ」と言うならば、信じない生き方があると思います。あるいは自分が同志社に入ったことによってキリスト教に触れて学んで、自分の家が浄土宗ということであれば、こういう教えなのだとすることで、命の理解を含めて自分の思想・価値観を形成していく。自分が何者か、なかなか分からない。分きたいけど、なかなか分からない。分かるためには友人がいたり、思想があったり、学問があったり、そしてキリスト教があったりするなかで、自分の思想は、自分の価値観は、自分の人間観は、このようにありたいということも含めて、私たち自身の現在の「存在」があります。ちょっとはいいところもある、いやらしいところもある、ちょっと褒めるべきところもある、自分でかわいいと思うところもある、現在の存在です。しかし私たちは、将来、一年後、三年後、こういう人間になりたい、と何らかの形で向上しようとしています。そのために勉強したり、本を読んだり、さまざまな体験のなかで、目標に向かっていこうとする。そのときの基準になっていくものが、儲かるか、儲からないか、有力か、有力でないかということだけでなく、もっと人間としての本質的な深み、そういう思想がどこにあるか。そういうときにキリスト教は十分検討の対象になり、学ぶ対象になる。それを学び、自分自身の宗教観・世界観・哲学を形成していくことが、実は大切なのではないかとというのが、ここに出てくる思想だと思います。

徳富蘇峰と新島との、実にそのような師弟関係、仲間うち同士の世界ではなくて、新島を裏切って出ていった人間との関係のなかで、このような豊かな人間関係を形成することができていた新島、徳富というのはすごい人間だと率直に思います。新島のこのような出来事を考えると、学生を切り捨ててしまっはいけない、距離を置くとか嫌われるといことはあるにしても、本質的に学生を切ってしまうはいけない、と思うのです。それが十分にできているかどうかは別の問題ですが、このような思想が、ここにあったということです。

徳富蘇峰は、ずいぶん長く生きた人で、一九五七年まで生きていました。「その主張は国家主義的傾向を濃くするに至ったが」というジャーリスト、評論家として知られているのかもかもしれませんが、決してそれだけではなかったということは、このことをととしてご理解いただけたらと思います。

その後も同志社のキリスト教の特色は社会活動に、社会とのコミットメントに非常に大きな役割を果たしてきたところに遺産があります。他のキリスト教系諸学校と比較して、同志社は特徴的です。

石井十次は、日本で最初に養護施設をつくりました。さまざまな事情で家庭崩壊となって、そのなかで行き場がなくなった子どもたちを集めて一緒に共同生活をして教育をしていきます。牧師ではありません、クリスチャンです。同志社を卒業した金森という人たちが岡山県の教会で働いて、その働きのなかからクリスチャンが生まれ、そのなかで「私はクリスチャンとしてこのような生き方をする」ということで、石井十次が養護学校をつくっていくパイオニアとなります。クリスチャンだからこその行ったことです。

私がこの時代に生きていたら、絶対に同志社英学校に入れなかったと思います。なぜかという授業がほとんど英語だったからです。入学試験で落ちたと思います。しかし「私はクリスチャンとして牧師になりたい」という人もいたのです。日本語で勉強するなかで、邦語神学科とか、別科神学科のコースができたこともありました。これだったら日本語でやるわけです。レベルが低いということはないのです。このなかから本当に優れた牧師がたくさん出ていくのです。家庭学校の留岡幸助は、そのうちの一人です。同志社の別科神学科を卒業した後、教会の牧師になり、どこで働いたと思いますか。彼は監獄、刑務所で教誨師をします。刑務所の中で活動する宗教家です。人を殺してしまった罪の意識、もしかして死刑判決を受けたら、死をどうにかして自分のなかで解決しなければならない。そのときに刑務所の中で働くお坊さん、牧師さんが要る。教誨師の第一号が留岡幸助です。アメリカに渡って監獄学を勉強して、帰ってきて家庭学校をつくります。非行少年の場合、その多くは家庭が温かくなかった。豊かな愛情に恵まれた家庭であれば非行が起こらないとなると、更生のために更生施設をつくるということで家庭学校をつくります。今も北海道にあります。敷地の中に畑があって、運動場があって、校舎がある、家がある。学校で勉強して、畑で働いて、自分たちが食べる物を作って、家で仮のお父さん、お母さんと住み、二十四時間一緒に過ごす共同生活の場です。

彼らは、国立大学、東大を頂点とするような教育システムとは全く違う価値体系のなかから生まれてくる、同志社が生み出した人材です。これだけではありません。キリスト教を捨てた徳富蘇峰は、彼らの運動をずっと支えていました。

救世軍もキリスト教の一派で、関心があれば十二月十日～十五日くらい、四条河原町の高島屋前に行ってみてください。たぶん、やっています。赤いラインが入った軍服を着てトランペットを吹いて道ゆく人に銅にカンパを要請する。NHKの年末助け合い運動よりはるかに昔に、救世軍はそういう運動をしていた。キリスト教のグループであって社会運動をずっとやり続けたのです。山室軍平も同志社の神学部の卒業生であります。

時代と状況もいろいろ違いはありますが、まだ日本の社会のなかで売春が公認されていたとき、ライセンスを持って売春宿を経営する人がいました。前借金で売り飛ばされて三年、五年とか拘束されて働かざるを得ない売春婦がいました。その地域の警察署も、それを黙認していました。そういうときに救世軍は出かけて行って逃がしてあげた後、きちんと匿って職業訓練もします。これは売春宿してみると営業妨害ですから、見つかると袋叩きになって殴り倒された。救世軍ですからそういう運動を「野戦」と言ったのですね。命を賭けてやったのです。そういう人材が同志社から生まれていったわけです。

キリスト教主義を徳育の基本とするという、キリスト教主義とは何なのか。「聖書を読んでわからない」「俺、クリスチャンと違う」というところで、どうか止めないでください。私たちの学び、社会のありよう、いろいろなことについてのキーワードが、この一節に埋まっていると思っているのです。「同志社大学設立の旨意」をととして、新島と徳富との人間関係、そのなかで形成され、継承されてきた教育理解、教育とは何か。日本社会のなかでの私立の大学の意味、しかも経営的にうまくいか、いかにいいという議論ではなく、教育原論・教育哲学が、同志社をつくりあげてきたのです。そして今私たちは、望んでか望まないでか、さまざまな要因で、同志社に迎え入れられており、同志社で働き、同志社で学び、一三〇年以上の鎖がつながっていて、これからも続いていくということです。そんなことを、この授業で、同志社スピリット・ウィークで、と一緒に考えてみたいと思った次第です。それでは今日はこれで終わります。

二〇〇七年十一月七日 同志社スピリット・ウィーク「講演」記録